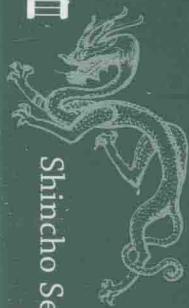


新潮選書



Shincho Sensho

新潮社

鈴木孝夫

Suzuki Takao

日本の感性が
世界を変える

言語生態学的文明論

日本の感性が世界を変える

言語生態学的文明論

鈴木孝夫



新潮選書

新潮選書



に ほん かん せい せ かい か
日本の感性が世界を変える

げん ご せいたい がく てきぶ んめい ゐ ん
言語生態学的文明論

著 者……………^{す ず き た か お}鈴木孝夫

発 行……………2014年 9 月25日
3 刷……………2015年 5 月15日

発行者……………佐藤隆信
発行所……………株式会社新潮社
〒162-8711 東京都新宿区矢来町71
電話 編集部 03-3266-5411
読者係 03-3266-5111
<http://www.shinchosha.co.jp>

印刷所……………二光印刷株式会社
製本所……………株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

©Takao Suzuki 2014, Printed in Japan
ISBN978-4-10-603756-6 C0395

日本の感性が世界を変える

言語生態学的文明論◇目次

序章

世界の主導文明の交代劇が

今、幕を開けようとしている

9

第一章

全生態系の崩壊を早める

成長拡大路線はもはや不可能

16

第二章

日本の感性が世界を変える

——日本語のタタミゼ効果を知っていますか

52

第三章

鎖国の江戸時代は今後人類が

進むべき道を先取りしている

67

第四章

今の美しい地球をどうしたら

長期に安定して持続させられるか

95

第五章

自虐的な自国史観からの脱却が必要

109

第六章

日本語があつたから日本は

欧米に追いつき成功した

141

第七章

日本語は世界で唯一のテレビ型言語だ

177

第八章

なぜ世界には現在六千種もの

異なった言語があるのだろうか

216

結語

237

エピローグ

人間は果たして賢い動物だろうか

241

あとがき

257

日本の感性が世界を変える

言語生態学的文明論

鈴木孝夫



新潮選書

日本の感性が世界を変える

言語生態学的文明論◇目次

序章

世界の主導文明の交代劇が

今、幕を開けようとしている

9

第一章

全生態系の崩壊を早める

成長拡大路線はもはや不可能

16

第二章

日本の感性が世界を変える

——日本語のタタミゼ効果を知っていますか

52

第三章

鎖国の江戸時代は今後人類が

進むべき道を先取りしている

67

第四章

今の美しい地球をどうしたら

長期に安定して持続させられるか

95

第五章

自虐的な自国史観からの脱却が必要

109

第六章

日本語があつたから日本は

欧米に追いつき成功した

141

第七章

日本語は世界で唯一のテレビ型言語だ

177

第八章

なぜ世界には現在六千種もの

異なつた言語があるのだろうか

216

結語

237

エピローグ

人間は果たして賢い動物だろうか

241

あとがき

257

日本の感性が世界を変える

言語生態学的文明論

序章 世界の主導文明の交代劇が今、幕を開けようとしている

十六世紀に始まる大航海時代以後現在まで、世界はあらゆる意味で西欧文明の主導する時代でした。ところがその時代が今まさに終わりを告げようとしています。それはこの人間中心主義（または人間至上主義）に裏打ちされた、理性と論理を極端に重視する西欧文明が、いろいろな点で行き詰まりを見せ始めているからです。

私の見るところ、これまでの西欧型の近現代人の目指す目標は、人間の幸福と繁栄のみであり、それに向かつて止め処のない生活向上や技術の発展を求め続けたために、自然界の安定した秩序を殆ど回復不能にまで破壊してしまいました。その結果としてこのままでは肝心の自分たち人間の存在基盤までも、掘り崩しかねないという、なんとも皮肉な自己矛盾をはらむ、人類自滅の道につながるものが急速に明らかとなってきたのです。

私は人間だけがこの世界で特別の、他の生物一切から隔絶した特権的な地位を占める存在ではないと確信しています。そこで今地球規模で急速に進行中の、人間圏をも含む自然生態系の崩壊を何とか食い止めるために、西欧キリスト教的世界観から見れば、これまで明らかに異端

視されてきたアニミズム的で汎神論的な世界観こそが、今改めて世界的に見直されるべきだと考えているのです。

難しい議論は抜きにしても、少し注意深くあたりを見渡せば、地球上のあらゆる生命体は、可視不可視の無数の糸で互いに複雑に結ばれていることが誰にでも分かるはずです。我々の住むこの地球は、結局のところ宇宙船地球号という一つの閉鎖空間でしかないのですから、人間も他のもろもろの生物と基本的には同じ資格の、数ある乗客の一員に過ぎないことを忘れてはならないのです。

前世紀後半から今世紀の初めにかけて活躍した米国の歴史学者サミュエル・ハンチントン^{注1}は一連の著作の中で、現在の世界には七つ（もしくは八つ）の独立した文明が存在すると述べています。独立した文明とは何かと言うと、その全体としてのまとまりから見て、ほかの文明の亜流または傍流といった位置付けをすることが難しいと考えられるものですが、この七つの独立文明の中に我々の日本文明も含まれています。

そしてハンチントンは、この日本文明には他の文明にはない際立った特徴があると言うのです。その特徴とは、日本文明だけがほかのどの文明とも互いに共通する重要な文明の構成要素、すなわち宗教、言語、文化、民族、そして領域をもたず、これら総ての点で日本がまとまっていることだと述べています。つまり日本文明は大きな文明ではあるが、孤立した文明だということです。

このハンチントンの指摘は、まさに私が以前から日本という国は世界の中で、他から切り離